兵　道

何事にも陰陽の義を以て比較し当てはめて、その道理を考察しなければならない。天地の両義が立って生成があり、殺壊（さつえ）があり、常住（滅びも 変わりもせず、永久に存在すること）があり、変易があり、動静治乱があり、進退・勇怯・盛衰・虚実・軽重・表裏がある。そうであれば、文事をなす者は、却って武備があり、武備があるときは、同時に文事がある。従って文を左として武を右とするのが古の法である。比翼のようでもあり、また両輪のようでもある。たとえ備え（武）があっても、それにあたる人（兵）がいない時は（文武）共に行われることはない。そうであれば、この兵の道にある者は、常に弓馬の技を練り、威武（武力に優れ、勇ましいこと）をもって世の中を統治するとはいっても、元より、その道の道たる所を悟って、あらゆることに於いて私を捨て、一向に常住の思いを抱いてはならないのである。天地は不動にして、太陽や月の動きには一定のきまりがあるとはいえ、その常なる中において、常なるものは無いということを思うときは、すなわち常変・変常の理にそれぞれ合致させて、これを不易の心法とせよ。不断にこの心をもって治乱公私の義を量り見ると、その本質は当たらずと雖も遠からずである。つまり、「武」というものは、もっぱら世の中を統治するための備えであると言うことを、よくよく心に悟るときは、すなわち兵ではなくても（いくさが無い状態であっても）武であることを知らなければならない。これを道の道たると言い、己に私無しという。兵道には従来異なるものが多々あるようだが、実際にはただ一つのものが二つの義に分かれ、さらに分かれてそれらが混合し、やむを得ずしてその中の一方を為しているのである。そうした一見多々あるような兵道の軽重表裏に到っては、正成自らがこれを通変の人（変化に柔軟に応じられる人）に伝えるものである。